

Title	マヌエル・ガルシア・モレンテのイスパニア性
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1968, 1, p. 93-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97873
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

マヌエル・ガルシア・モレンテの イスパニア性

森 本 久 夫

1

「……変化なり発展なりの経過を、端的にある実体的なものの、あるいはある根本的な力などの発現や表現として把握すること、いいかえれば、歴史をある根本的な何ものかの歴史として解釈し把握すること、これが歴史観であると考えられる。すなわち文化史観とは、文化についての記述や敘述である歴史をいかに把握するかを問うものではなく、端的に文化としての歴史把握であり、歴史を根本的に文化現象として把握する見解であろう。……」^①

私はこれからイスパニア文化というものをその文化の歴史を通じて学んでいこうと志しているが、それはイスパニアの文化事象を歴史的過程の中に把えること、そしてその変化あるいは発展という歴史的事実を生む根本的なもの（イスパニア性）を学ぶことであり、それによってイスパニア文化を理解し、そしてそのイスパニア文化というものが私たちにどんな意義をもつか考察することであると思う。

ここでは、そのための模索のうちに出会ったマヌエル・ガルシア・モレンテの考察をあとづけることによってその足掛りの一つを得たいと思う。

2

マヌエル・ガルシア・モレンテ Manuel García Morente (1886—1942) は26才でマドリ－大学の倫理学の教授になった。Walter Goetz の世界史の翻訳があり、主要作品には「カントの哲学」La filosofía de Kant, 「アンリ・ベルグソンの哲学」La filosofía de Henri Bergson, 「哲学初歩」Lecciones preliminares de Filosofía などがある。1940年司祭に叙任された。Julián Marías はモレンテについて次のように述べている。「モレンテは独創的な哲学者、一つの体系の創造者ではなかったし、そうなるうともしなかった。しかしまた彼は、哲学に造詣の深い単なる学者でもなか

った。彼にとって、哲学はまさに生きた現実であった。」「イスパニアにおける哲学史でモレンテを二流の位置に決しておくことはできない。」「彼の著書はわずかであり、大抵は講義録や講演である。著作は主として翻訳であった。」「しかし翻訳家である以上に、モレンテは大学の教官であった。彼の主な哲学的仕事は口頭による直接的なものであった。モレンテの授業を一言で定義しなければならないとすればこうであろう。明晰。」「内的要求から彼は神という偉大なテーマと直面することになった。それゆえ、モレンテがカトリシズムに活発に結びついたとしても、それは彼の哲学の挫折を意味するのではなく、充実を意味したのである。」「死が、哲学が彼から期待できた偉大な新たな寄与をうける前に、突然彼を襲った。」^②

ここでは彼の *Idea de la Hispanidad, Espasa-Calpe S. A., Madrid*, 1961をテキストに選んだ。このテキストでは1938年6月1日、2日の2日間にわたってブエノス・アイレスの *la Asociación de Amigos del Arte* での講演「イスパニア性の理念」*Idea de la Hispanidad*, 1942年5月12日に *la Real Academia de Jurisprudencia* での講演「教皇座とイスパニア性」*El Pontificado y la Hispanidad*, 1942—1943の学年始めのマドリ―大学での講演「イスパニア歴史哲学への諸理念」*Ideas para una filosofía de la historia de España*の三つの講演が納められているが、二番目の講演は特にローマ教会との関係、三番目の講演は歴史学からみたイスパニア性という点に重点がおかれ、どちらも一番目の講演の論旨を補足・説明するものであるので、主として一番目の講演を中心に彼の論旨を追ってみることにする。

3

イスパニアは4回世界史の焦点となったことがある。

その第1回は古代にローマがイタリア半島を出てイベリア半島に侵入してきたときである。当時まだイスパニアは存在しておらず、地理的実在としてだけ存在していた。しかし、ピレネーからアフリカとの境界線に至る地域に住む人々は、その後の幾世紀にわたってイスパニア人が發揮してきた徳性をすでにそなえていた。彼らはローマ軍の侵入と定住にあまりにも頑強に抵抗したため、イベリア半島をローマ化するためには2世紀もかかったし、その間ローマは最強の軍隊をさし向けたのであった。この戦いに

は勝者も敗者もなかった。というのは、ギリシヤについてと同様のことがイスパニアについても言えるからである。つまり、被征服者が征服者を征服したのである。イスパニアがローマに屈服したのは軍事力によってではなく、一つの文化・普及力の大きい文明の優等性によってであった。イスパニア人はついにローマ帝国という諸民族の合意体の一部を形成することになった。しかし、このときイスパニア人はローマから受けた文化的恩恵に対して利子をつけて支払っている。すなわち、イスパニア人はローマ人の生活の歴史的・文化的方向づけに特異な刻印を刻みつけた。つまり、イスパニアがラテン（ローマ）化されると同時にローマをイスパニア化していったのである。イスパニアからローマへ人物・理念・思想などがもたらされた。それらは当時の世界史であるローマ史に消えることのない足跡を残した。一群の皇帝・哲学者・詩人・雄弁家たちがローマ帝国の政策と文化の方向づけに影響を残した。^③

イスパニアをはじめての外的要素との接触において必要なものは同化し、一方自分自身のもつ特異性は維持することができた。

第2の時期はアラブ（イスラム）世界が西ヨーロッパからヨーロッパ（キリスト教世界）に侵入、イスパニアを席卷、ヨーロッパの他の地域になだれ込み、キリスト教世界を荒廃させようとした時期である。一握りの高い使命感に目覚めたイスパニア人たちは回教徒の波に驚くべき抵抗を見せた。アストゥリアスの山岳地帯でキリスト教世界は踏みとどまり、ヨーロッパの本質は救われた。それから8世紀間、イスパニアはヨーロッパの防衛の役割を果たしたので、ヨーロッパの他の諸国は平穩のうちに国内問題にかかずらっていたのである。イスパニアはヨーロッパの防衛という歴史的運命を勇氣と謙虚さをもって受け入れた。そして8世紀の間に二つの巨大な事業を遂行した。すなわち、アラブ人の圧迫に対して血と肉をもって抵抗することによってヨーロッパの安全を守ったこと、もう一つは自己形成、つまり自らの統一と運命を自覚した国家に自己を育成したことである。この国家形成の時期にアラブ世界の精神形態の拒否と、生まれつつある国民性の基本条件をあくまで守ろうとする気もちから、異質なものを否定して自己を肯定しようとする二面においてイスパニア的生き方が発展したはずである。かくて宗教的精神（キリスト教精神・カトリック精神）がイスパニアの国民性の基本要素を構成するに至った。アラブ人では

ないということとキリスト教徒であるということとは同義であった。否定は肯定を示していた。異質の、異教の、相容れない信仰との不断の戦いの中でもっとも自己の内質な要素を育てていかなばならなかったイスパニアはその内奥においてますます人生に対するキリスト教的感情を強めていった。このとき以来、キリスト教はイスパニア性の理念そのものと同質のものとなったのである。しかし、この800年にわたる回教徒との闘いによってカトリック的感情以外に個人における戦闘的徳性の強化という特殊なあり方がイスパニア人の心の中に展開される。この徳性が何百年間にわたる実践の中で純化されて、この時期の終わりごろ騎士 **caballero** という人間タイプに凝縮されるに至る。

第3の時期は16, 17世紀。積年の事業は完了し、最後の回教徒が国境を越えた。そして同時にイスパニア人の心的輪郭を完成したばかりである。800年間の再征服の間に純化してきたエネルギーがイスパニアという国家を形成し、人生に対するイスパニア人 **hombre español** というタイプが決定的にできあがったのである。そしてイスパニア性は内的作業を完了し、外部へと広まっていく。国境を越え歴史の流れの主導権を手中におさめ、この2世紀の間世界史を牛耳ることになる。イスパニアはこの覇権をもっていた時代に近代政治がその基礎をおいている三つの基本理念を世界に示したのである。すなわち、第一にヨーロッパの他のどの君主よりも先にカトリック両王が実現させた国家 **Estado nacional** の理念である。正に再征服の大事業がイスパニアが国家と君主と国民が活動する政治的統一体として融合し、君主制があらゆる意見を異にする力から権力を奪い、中世的封建主義の最後の痕跡をとり除いた最初の国となるための準備をした。ヨーロッパの他の国々ではまだ領主たちが王に対抗して大きな勢力をもっていたが、カトリック両王のイスパニアではすでに王権が国民と一体化して強大になり、あらゆる反対をおさえ、反乱を平定してしまった。第二にカトリック両王下のイスパニアは世界ではじめて新しい国家にとって不可欠な国軍 **ejército nacional** を創設した。もし王が、領主としての王でなく国家の議論の余地のない元首としての王の命令に服従するこうした軍隊をもたないならば、自身の政治理念を実現することはできないであろう。第三に近代帝国主義政治の理論と実践を示したことである。カトリック両王からフェリペ4世までのイスパニアは地球上にその世界帝国の版図を拡げ、ヨ

ヨーロッパだけでなく、航海者たちが発見する新世界にまで拡げ、世界史上最大の帝国を実現する。これらの三つの教訓を他のヨーロッパの列強たちがイスパニアにならぬ、あるいは対抗して実現しようとしたのである。

第4の時期は現代で、1931年以来イスパニアは外国の目に見えない軍隊によって侵略をうける。モスクワの共産主義インターナショナルはイスパニアを占領することに決定、この世界からイスパニアの国民性を抹消して、ソビエト連邦の一部にしておこうとした。イスパニアをソビエト化することによって、一方にソ連を、他の一方にイスパニアを置いてヨーロッパを挟み込むことをねらった。これはイスパニアを世界史の焦点におくものであった。というのは、この計画が成功するにせよ、失敗するにせよ、未来の世界史を変化させる事件であるからである。

モレンテは以上の四つの時期を指摘し、それらの時期におけるイスパニアの態度に共通したものとみる。それはイスパニアがつねに歴史的運命がもたらした仕事をためらうことなくストイックに、英雄的にひきうけたことである。しかし、イスパニアはそうした自己の運命に忠実であると同時に自己の本質つまり自己の精神的存在にも忠実であった。事実はいずれも入れるが、それらの事実が自己の精神を支配することを決して許さず、反対にイスパニアこそ、それらの事実の上にその精神的本質の消えることのない刻印を残したのである。運命に対して忠実であることは決してイスパニアが自己に、自己のもっとも内奥の本質に対して忠実であるための妨げとならなかった。歴史の上で、イスパニアは受動的な存在ではなく、つねに能動的な存在であらうとしてきた。従って18、19世紀のイスパニアは自ら世界史の舞台から孤立 *aislamiento* したものと考える。モレンテはこの時代を *decadencia* とは考えない。^④

イスパニアの歴史からわれわれがイスパニア性 *hispanidad* と呼ぶものが生み出されたが、またイスパニア性によってイスパニアの歴史が生み出されてきたことも確かである。なぜならイスパニア人がイスパニアの歴史をつくるからである。以上の四つの時期をイスパニアの国民性（イスパニア性）の面からみると、第一の時期は準備の時代、第二の時期は形成時代、第三の時期は形成されたイスパニア性が拡大される時代、第四の時期は孤立の時代となる。

では次に国民性について考えてみよう。

国民性というものを血液・人種・土地・言語といった自然物によって規定する見方とその民族がもつ歴史からその歴史を築いてきた人間の精神的特質を見出そうとする見方とがある。モレンテは前者の見方を自然的見方、後者を精神的見方と名づけ、前者の誤まりを指摘する。

すなわち、血液あるいは人種の上からみた場合、イスパニア人とはケルト人とイベロ人が混血してセルティベロとなり、それにローマ人の血が入ってイスパノローマノとなった。ゲルマン系のスエボ、アラノ、バンダル、それにビシゴードが混血、それ以外にギリシヤやフェニキア、アラブの血などが混っているかもしれない。だからイスパニアの国民性が人種的純粋さを基礎にしているなどとはいえない。またエル・グレコの例を挙げ、彼は人種的には生粋のギリシヤ人であったが、イスパニアを非常に深く同化し、彼の作品はイスパニア精神をもっともよく表わしたものの一つとなっている。

土地の上から考えた場合、一例を上げると地勢的にはガリシアはイスパニアの他の地域よりポルトガルに近い。しかし、ガリシアの人々はポルトガル人よりもイスパニアの他の地域の人々により近い。言語についてみた場合は、その国の国民性が、精神的必要性がその国の言語を作ってきたのであって、言語がその国民性を作ったのではない。例えば国の統一の妨げになることなく一国の中にいくつも異った言語が存在し得る。なぜなら、国の統一は言語の統一によるのではないからである。

これらのものが重要ではないとはいわない。ただ国民性というものをこれらのものを超えたものとするのである。これらのもの全体を内包するものとしてイスパニアを考える。人間の身体にたとえると、これらの血液・土地・言語といったものは肉体であって、中心にイスパニア精神というものがある。だからイスパニアの国民性を自然物と見る見方は根本的に誤まっていることになる。国民性というものは物 *cosa* ではないし、まして自然物 *cosa natural* ではない。そうした自然物、具体的なものを超えたものである。それは人間だけが作り出すもの、特に人間的なものの特徴（反自然的なもの）をもつものである。それは人間が自然的なものと同自然的なものから成り立ち、他の動物と比較したとき、その反自然的なものこそ人間的なものの特徴であるとする考えが根底にある。例えばある種の

動物の生活をみると、その動物の属する種に支配する自然法則に従って生活している。同一種の2個体の動物は同じ生活をおくる。彼らは自らの生活・存在に責任はない。すでに作られている生活をおくるだけである。それに対して人間は自由で、自分自身のために生活を築かねばならない。人間の自由とはこの点にある。つまり人生とはあらかじめ自然法則によって作られたものとしてやってくるのではなくて、人間自身がそれを生きるに際し、各瞬間に前もって決定し、築いていかなければならないものである。従って動物には個体の特異性はでこず、一つの種全体に一様性がみられる。それに対し、人間の生き方は厳密に個人的である。一様なものではなく多様なものである。歴史にもその同じ多様性がみられる。なぜなら歴史は人間によって新しいものたろうとするあり方がたえず作られていくものであるからである。つまり人間の生活と同じで、自然法則が予定することのないものである。人間は自らの生活を築くように歴史を自由に築く。それゆえ、歴史の中にはいろいろな人間のあり方というものが見出されることになる。国家とか国民性というものもそれと同様、人間の自由が作り出したものである。

われわれが参加しているものである国家は、同時に未来の計画として、あるいは現在の状態として、あるいはきわめて長い過去の歴史として現われるものであるから、結果的には、過去の歴史的現実でも現在の歴史的現実でも未来の具体的計画でもなく、この三つの時点に共通にあるものであり、これらの時点の複数性をこえて、この三つを一つの存在の統一性の中に結ぶもの、この三つを同質なものにさせるものである。したがって、国民性というものはイスパニア人の各人が「私はイスパニア人です」というとか、イスパニアと呼ばれている過去・現在・未来の現実に参加していることを立証することにだけあるのではなくて、主としてイスパニアのあらゆる事実を時の中にあって結合し、一つの実体のいろいろな面を作るところの本質の同質性にあるのである。イスパニア人であることは、イスパニア風に、祖先たちが行動したのと同じように行動することである。過去・現在・未来のあらゆる事実間にある類似性・同質性が型 *estilo* である。国家は一つの型であり、集団生活の一つの型である。

Guzmán el Bueno と Moscardó 将軍の生涯を比較した場合、ヌマンシアとトレドのアルカサル（要塞）の防衛を比較した場合、それぞれ内容は異なって

いる。しかし、型は同じである。あらゆるイスパニアの芸術・文学・人物・生活のあり方にイスパニア的なもの・共通的なものを見る。これが型である。人間はあらゆる行為において、よりよくやろうとする。よりよい自分になろうとする。そのため、自分たちのしていること、作り出すものに、そうした理想の刻印を刻みつける。それが型である。つまり、型を構成するのは行為や事実の客観的現実ではなく、行為者の内奥の人格を表わすあり方である。ところが多くの人間が集団生活をつづけている間に、各個人のそれぞれの理想の中にくりかえされるある特定の人間のあり方、タイプというものが生まれてくる。それが一つの国民性というものである。モレンテはキリスト教的騎士 *caballero cristiano* の中にイスパニア人のそうしたタイプを見出している。

5

ドン・キホーテ、エル・シッド、ベラスケスの「槍」*Las lanzas* 中のスピノラ侯、エル・グレコの「胸に手をやる騎士」*El caballero de la mano al pecho* などはイスパニアの代表的騎士の姿であるが、ある特定の時代、場所、局面に向けられたものである。ここでとり上げるのは、理想的なタイプとしてのシンボルに使うような普遍的なものである。あらゆるイスパニア人が心の底でそうありたいと願っているものを具現している人物像である。ローマ人にとっての「余暇と品格 *otium cum dignitate*」のある人、イギリス人にとっての「紳士 *gentleman*」にあたるイスパニア人の理想タイプを、前述のようにモレンテはキリスト教的騎士に見出している。それはイスパニア人がすでにそうであるというより、そうありたいと願う真のあり方である。こうしたタイプは800年にわたる再征服の間に育て上げられたものであり、異教との戦いのうちにキリスト教的騎士の魂の髓まで宗教性がみだされていったのである。騎士はもともと「根本的には相容れない二つの理念、しかもつとめて一つに結び合わせようとすることになる二つの理念の出会いから生まれた。その二つとはキリスト教徒としての愛（カリタス）と、戦士としての力とである。」^⑩したがって、キリスト教的騎士の特徴は絶対的至上価値である善の擁護者であり、直接的であって悪い現実を変革するのにまわり道をしない。ただちに、しかも全面的に変革しようとする。また意志の道徳的力に対する絶対的信念から楽観的であ

る。キリスト教的騎士にとって、道徳的理想はただちに完全に実現しなければならない。こうした感じ方、考え方はある種の現実軽視を含んでいる。物や肉体は精神に従うものである。だから、精神に従わないなら、暴力によってでも従わせねばならない。それはときには苦行となり、自己または他人に対するこらしめとなる。もっともよい、完全なものである自己の良心の命令によるため、たえず生活全体が変革に向かつていなければならないことになる。

こうしたキリスト教的騎士に対するモレンテの心理分析を辿ってみよう。

1. 卑小なものより偉大なものを求める。ここでいう偉大さとは自分自身の価値を認めることで、自分のもち物よりも自分自身の方により大きい価値を認めることである。したがって物の欠乏によく耐える。イスパニアの歴史にエル・エスコリアールの修道院など、いくつもその例がみられる。この卑小なものより偉大なものを選ぶ気もちから、イスパニア人のもつ、ときには狂気的でさえある物惜しみしない態度、物質的なものの軽視、物を犠牲にするときの落ち着き、素朴さなどがでてくる。

2. 気おくれよりも勇気を求める。勇敢で向こう見ずで、神と自分自身（良心）以外は恐れない宗教的態度である。運命には従順である。しかし宿命論的ではない。自分の運命は自分が作るものと考ええる。そしてその運命を神の摂理とみなして従順にうけ入れる。

3. 尊大でときには誇り高い。自己に対する確信と偉大なものを求める気もちと向こう見ずなところが結びつくところから出てくる。自分自身ほどに何事も評価しないところから、どんなにほしいものでもわざと評価しない態度にでる。自分が金持ちであれば金持であることを自慢し、貧乏なら貧乏なことを自慢する。

4. 計算よりも虫の知らせの方に頼る。アメリカの征服に出向いた人々がもし計算して行動する人間だったらメキシコやペルーは征服しなかったろう。これは自分自身と自分の運命に対する信頼からでてくる態度である。

5. 人格の尊重。他人の中でも個人的人格だけは尊重する。他者とのつき合いでは友人か、そうでなければ敵で、形式的な関係はない。指導者に対する服従においても、その指導者に指導者としての特性を認めないと服従しない。イスパニア人の間では選挙で選ばれた人でなく、本当に力のある人が命令する。イスパニアの騎士はあまり恨みを抱かない。それは自分

自身を高く評価しているため、他人に羨望を感じたり恨んだりしないからである。

6. 体面礼賛。体面は人格の内的価値の外面的評価である。自分自身の人格に最大の敬意を示し、そして自身の人柄、行為にある弱点は世間からかくす。キリスト教的騎士は自分は脆弱な存在であり、罪におちいるものであることを知っているが、自分の生活を高い理想においているので、告解において以外、人間的弱さをかくさざるを得なくなるのである。

7. 死を喜んでうけ入れる。キリスト教の信仰からくるものであって、この世ははかないもので、永遠の生命のある死後世界への途次と考えると、ここからくる。

6

以上みてきたように、モレンテはイスパニアの過去をふりかえり、過去の各時点におけるイスパニア人の生き方・行動の仕方の中に共通点を求め、そこからキリスト教的騎士という理想的イスパニア人のタイプを見出す。したがって、彼にとっては歴史とはその民族(一つの文化を共有する人々)が自由に自らの責任のもとに築いていくものであるから、イスパニアの歴史とはキリスト教的騎士であろうとする人々が築く歴史である。非常に宗教性にみちた人間の歴史となる。Jean Descola の *Historia de la España cristiana* はそうした見方でイスパニアの歴史を眺めたものということができよう。そこに見られるのは、いつも社会正義のために献身する人々である。キリスト教の愛の実践の歴史である。イスパニア史の一つの特徴であることは確かである。

キリスト教的騎士というタイプはモレンテ自身が述べているように直観的結論である。彼の哲学的考察の産物である。これが元にもどってイスパニアの歴史に適合するかどうかはこれから検討すべきであろう。モレンテがキリスト教的騎士の心理的分析において述べているように人格の尊重ということが重要なイスパニア人の特徴である。そして、そうしたイスパニア人にとって人間関係は非常に友愛的なものか敵対なもの(私的關係)で、形式的なもの(公的關係)はないとする。ところが、近代はそうした形式的関係が多くなっていく過程であり、キリスト教的騎士(イスパニア人)にとってふさわしくない時代となる。これからの問題は、そうしたモレン

テの時代の評価がどこまで妥当すかどうか検討していくことでもあろう。

註

- ① 茅野良男；歴史のみかた，紀伊国屋書店，1964，p. 30
- ② Julián Marías；*Filosofía Española Actual*，4ª ed.，Espasa-Calpe，S. A.，Madrid，1963 pp. 123-131
- ③ Jean Descolaも同じことを指摘し，ローマがキリスト教をうけ入れるためにセネカが精神的架け橋となったと述べている。*Historia de la España cristiana*，Aguilar，S. A.，Madrid，1954 pp. 15-18
- ④ Joaquín de Encinas；*La tradición española y la revolución*，Ediciones Rialp，S. A.，Madrid，1958 pp. 14-15
- ⑤ デュ・ピユイ・ド・クランシャン，川村克己・新倉俊一共訳；騎士道，白水社，1963 p. 10